

『職業科』 1948年6月（出版元不明）

農村社会と職業科

矢 口 新

1

現在日本の農村はさまざまな問題に当面している。農地改革を発端として農村民主化の問題は今なお進行中であり、技術改良もようやく注目されはじめたに過ぎず、就中農業恐慌の予想は日本農業を世界的視野において検討せんとする気運を生ぜしめている。しかし農村の問題はこういう生産部面の問題ばかりでない。消費生活の部面においてもたとえば衣食住の合理化問題、慣習の改革問題、婦人問題等があり、その他文化問題・保健問題・政治問題等実に多種多様な問題が山積している。しかもそのいずれもが永い慣習と伝統を問題とするものであって、いうに易くして行うに至難のものばかりである。

一般に日本の社会が外形の点において近代的な様相を示しているけれども、その内面においては非常に多くの近代化されない部面をもっているということはよくいわれることである。

農村社会においてはこの点が特に著しいのであって、そこに多くの問題がある。もちろん農村社会はその外形においても極めて非近代的な姿を示していて、その点都市社会とは著しい対照をなしている。しかしそれらはたとえば農地改革のような社会改革の実施によって一応形は近代的にととのえられることが可能である。しかしそれを以て農村社会の問題は何一つ解決されたわけではない。ただ第一歩を踏み出したにとどまるのである。この点は現在日本で行われた諸種の改革方策が実は日本民主化の第一歩であることと同じである。現在は何一つ問題が解決されたのではない。問題が発見されたにとどまる。否ある事柄については単に理想が提示されたにとどまるといってもよいであろう。これを現実化するには言語に絶した努力がなくてはかなうまい。それは農

村社会に住む人々自身の問題であって、外から手を下しようのない事柄である。

農村社会がもつ問題は単に観念の問題ではない。それはあくまで実践によって解決されなくてはならぬ問題である。しかもその実践は単に個人的な実践でなく社会的なものである。一人一人が行えばよいというようなことでなく、全ての人の協力によって行われねばならぬ事柄である。それはしたがって意見の衝突や闘争をも場合によっては引き起しかねないのである。そうでなくてもさまざまな難関に当面することは必然である。現在農村社会に住む何人がこれらの問題解決に乗り出そうとも第一にぶつかるのは他の人々との意見の衝突であり、反対であり、あるいは無関心であり、あるいはしりごみである。総じて保守的な農村社会においてはまず農民の保守性に衝突するであろう。

しかしそれは単に農民の保守性にのみ責を負わすことはできない。実は問題自体がそれ程根本的なものであることを考えてみなくてはならない。いずれの問題も農村社会の根底に根を下ろしているものであって、課題を発見するのに深い理解と洞察を必要とするのである。さらにどの問題の一つを取上げて手術を施しても、いずれもそれを発端として農村社会の全体を、ゆすぶるようなものである。そこから農民の生活感情と慣習に早急には沿い得ないものがあるのである。ということはそれ程農村の非近代的な生活構造が根強いともいい得るのである。

こういう問題の解決は実に農民その人にかかっているものであり、ただ上からの政府の方策や指導によるのみであっては到底不可能である。ここに農村における新しい人間像が要請される所以があるのであって、農村社会の教育問題は実にこ

こから発する。少し極端な表現をもってすれば数千年の伝統を破壊するような人間像が要求されているのであり、今後数世紀の伝統をつくる人間像が今求められているのである。農村社会の課題の解決は、実にそういう人間を育て得るか否かによってきまるといふべきである。農村社会の外形の革命でなく内実の問題、実体の改造は教育問題にかかっているといふべきである。

このような人間像は一言にしてこれを実践者ということができよう。農村社会の問題が以上のように困難な問題であるとすれば、これを解くべき人間に要求されるのはこの困難に逢着してなお且つ実践に邁進し得る人である。困難なことに正面からぶつかることが、あたり前であるような人間が求められるのである。困難なことに逢って愚痴をいい退却する人は未だ真に実践者の名に値しないであろう。実践とは困難を克服することが本質的な性格であって、美しき理想を考えてもこれを実行するにあたって困難であっても直ちにしりごみするような人は結局において観念者というほかはない。実践とは難局の克服ということではなければならない。当然のことを安易に行うことは習慣的な行動にすぎないのであって、実践とはいえないであろう。

今後われわれが打ち立てなければならぬ教育の姿はこういう実践者を育てあげる構造をもっていないとすればならぬ。そういう教育はもちろん観念的な教育であることはできない。これまでわれわれが作りあげてきたところの教育は、結局は観念者をつくる教育にすぎなかった。知識をもてる人間ではあったかも知れないが、かれらはいわば青白かったのである。困難な現実の問題にぶつかって、これを解決することを教えられたことはないであろうし、そういう性格をかれらは未だ自らの中に育てられたことはないのである。

2

新しい教育が目指すところはこういう実践者を育てることであり、それは実践的な教育である。子供の教育がそういう性格をもつべきであることはもちろんであるけれども、大人の教育も青年

の教育もまたかくあるべきであろう。それは具体的にどういうことであるかといえば、大人も子供も農村の現実の問題の中で教育されるべきであるということである。

農村社会の生活者は子供の時から農村社会の問題を自覚し、これを解決する実践の生活することによって実践者となり得るのである。一切の教育内容がこの農村社会の問題解決の点から考えられなくてはならぬ。何故かというに、教育は生まれた時から職能者としての教育でなくてはならぬということである。小学校・中学校の教育はもちろんである。

農村社会に生れ、そこに育つ子供は既に最初から一定の生活構造の中で生活している。教育がこの現実の生活構造から離れるならばそれは宙に浮いたものとなり、生活に働かないものとなるであろう。今後の教育はその現実生活の問題に常に直面させ、これを課題として、それぞれの程度において、子供は子供なりに、大人は大人なりに、大人の中でもそれぞれの程度に応じて課題解決に努力するような教育であるべきである。そういう教育が行なわれてはじめて農村社会の発展が期待されるのである。

このような教育となるならば、教育の姿はこれ迄のものとは全面的に異ったものとなるのである。社会学習も、自立学習も、技術の学習も、芸術の学習もすべて農村社会の課題の解決に即してなされるべきである。たとえば農村社会の問題である技術革命にしても、協同化の問題は社会的側面の学習であろうし、機械化の問題は自然学習や技術学習の問題であり、施肥の改良の問題や、栽培の問題は自然学習の問題であり、協同組合の問題は社会学習となるであろう。

現在学校教育は教科を以て教育する方式をとっているが、これらの教科がすべて農村社会の課題の解決を各側面から取扱うものとなる時にはじめて、真に農村社会の発展と建設をはかり得る実践者を教育する構造をもつことになるのである。このような教育となった時に、真の実践者のための教育となるのである。こういう課題に当面してそこにさまざまな難局を経験し、可能な限り

で一步一步これを解決する生活を歩む時において、実践的性格が身につくのである。こういう教育はいわば職能的な教育ともいうべきものであって、これ迄の一般的な教育とは全く構造を異にする。そこにおいては、職業科のあり方も従来とは非常に異ったものとならなくてはならぬことが、注意されねばならぬ。

現在地域教育等といわれて、特に社会科においては地域の現実の中から教育が行なわれることが一般となりつつある。聞くところによれば理科も近い将来においてその形をとることになるそうであるが、教育の目標が実践的な社会の建設者を育てることにありとすれば、このような傾向は必然のものといわざるを得ない。

現在農村の職業科が当面している問題は、このような教育の一般的動向の中において考えらるべきであろう。従来の職業科は、観念的な一般教育の中で職能者としての教育にふれる唯一のものであったといつてよいであろう。小学校において行われた職業指導のようなものも、現実的な生活内容にふれ得る唯一のものといつてよかつたのである。しかし職業指導として中途半端な性格にとどまざるを得なかつたのは、教育全般の動向に左右されていて、その枠の中で行われたからである。新制中学校の職業科は、このようなものではないことは少なくとも明らかであろう。しかし教育全般の方向が地域教育の線にあり、教育の一切が地域の現実において営まれつつあること、したがってそれは職能社会の教育に一步進んでいることを、明確に自覚しているものは少ないといわなくてはならぬ。この点の認識において欠けるところがあるならば、職業に関する雑然たる知識の羅列的教育となつたりさらには職業指導的な宙に浮いたものとなる恐れなしとしないのである。

農村社会は一つの職能社会とみることができる。この社会の現実的課題を中心として教育が展開されるということであれば、そのすべての教育内容は職能生活を中心として構造づけられるのである。同じことを学んでも工業生活者とは異つた視点においてなされるのである。たとえば、日本の工業の状態を考えるとということでも、それは

農村生活者としての見地をもっているのであり、単に工業に関する事柄を漠然と知るといふことではない。ましてや工業生活者としてみるそれとは極めて異つた態度をとるのである。実践とはこのような一つの立場において物を考えて行うことであつて、この立場をはなれた一般的知識は、実践とは縁がないのである。

このようにして教育が実践的性格を帯びてくると自ら職能的な立場に立つこととなり、そこに従来のような何処にも通ずる教育という抽象的な知識教育は、否定されることになるであろう。真に人を育てるといふことになれば、どこまでも職能的地盤を離れることはできないのである。しかしそれは実践的性格において一般に通ずる教育となるであろう。農村社会の課題を解決し得る人間は、都市生活者としてもすぐれて実践的たり得るのである。このような教育が今後においてあるべき姿である。

3

このような教育において職業科は如何にあるべきであろうか。一般教育が職能生活に関係のない事柄を教育するというようなことであれば、職業科は職能生活に関することを取扱うという性格をおびてくるであろう。しかし一般に教育が農村社会の現実において営まれることになれば、それはすべてが農業生産という職能を中心として構造づけられるのである。社会科も理科も、あるいは芸能も工作もそれらの学習は機能的生活を地盤として展開されるのである。このような場合に、職業科が如何なる形をとるべきかが明らかにされなくてはならない。

農村における、職業科が農業を中心とすべきことはいふまでもないことであるが、それが真に農村社会に根を下ろしたものであるためには、単に農業に関する基礎的知識と実習とを漫然とやっているということであつてはならないであろう。そういう羅列的な知識と技術の教育は構造のない点で実践者の育成には用をなさない。村の問題を解決しないでは、日本の農村建設に役立つべき力を養う教育とはならないのである。

地域社会に根を下ろした職業科はまず村の農業問題を中心として構造づけられなくてはならない。それぞれの村は個性的な存在として独自の生産構造をもっているのであって、そこからそれぞれ独自の個性的な問題を発生せしめている。これらの問題を中心として農村の職業科は展開されるべきである。この場合一般に農業を行うに必要な知識と考えられたものは、この問題を解くにあたって、それぞれ適当な位置が与えられるのである。たとえばたまねぎの栽培ということはどこの村にも平等に必要なこととしてあるのではない。ある村では最も重要なものとしての位置を与えられるであろうし、ある村では将来の問題として置かれるであろうし、またある村では直接栽培はしないが、栽培法の類型を研究する場合の問題として置かれるであろう。こういう構造が与えられるとそれぞれの村の職業科は極めて独自の姿のものとなるのである。そこにはじめて村の問題を解き得るような教育が展開されるのである。

このような職業科になると農業に関する知識と実習をただ漫然とやっているということではできなくなる。一つの問題はさまざまな生活領域につながりをもっているので、単に農業に関する知識をその自体がもつ体系にしたがって与えておればよいということにはならず、日本や世界のさまざまな産業がこれに関係してくることになるであろう。実習も決して村で行われたことだけが実習されるのでなく、村の課題を解決するためには、全然行われなかったようなことも実習されなくてはならなくなるであろう。

ところで社会学習や自然学習が村の産業に関してその社会関係や自然的基礎を追究する教科として置かれている。社会科や理科は産業にのみ関係してはいないけれども、地域の生活に根を下ろしたものとなれば、当然農業という職能を中心として展開されることになるのであるから、農業に関する社会的基礎、自然的基礎の追究は社会科や自然科が担当するものとなるであろう。事実そうなるのはじめて教育が真に地域社会の現実に根を下ろしたものとなるのである。

しかし農業の問題は単にその自然的基礎と社会関係のみが追究されたのみでは解決され得ないのである。真に現実的に解決されるためにはその技術的な実践が伴ってはじめて、可能となるといわなくてはならない。事実問題の解決とは真の意味では技術的表現による解決であって単に概念のことではないのである。このような技術の問題が実は根本的な課題であって、これを中核として、その社会的基礎や自然的基礎が学習されるべきものなのである。

農村社会の職業科が真にその現実に根を下ろしたものとなるということは、このような農業問題の技術的実践ということに帰着しなくてはならない。これを中心として社会学習も、自然学習も、その周辺に展開されることになってはじめて真の地域社会の職能教育が成立することになる。現在社会科と理科とが次第にその姿を与えきかたっているとはいえ、依然として非生活的、抽象的な形態をとっていることは、認められなくてはならない。こういう時にあたって職業科に課せられた任務は大きいのであって、職業科によって教育構造の全面にわたって、改革ののろしをあげることができるといわなくてはならない。職業科こそ農村社会の問題を正面から取りあげ、これが解決に邁進し、ほかの教科に現実の地盤を与える主体となるものである。

農村の職業科はこのような意味において農業技術を主体として展開されなくてはならない。しかしこの場合の技術は、従来の技術概念によるものとは異って、より広い意味の生活の中心的領域を占めるものとしての技術である。技術的実践ともいべきものであろう。かかる技術実践を中核として、社会科も理科も成り立ち得る。この意味で職業科は職能教育の中核として意味づけられなくてはならない。同時に技術による知識教育の克服として重大な任務をもつことも深く認識されなくてはならぬ。職業科の概念を拡大することによって、今後の新しい教育の成立の地盤がみえてくることに注意すべきであろう。

(中央教育研究所々員)